



たいようこくてんろん
太陽黒点論

ガリレオ・ガリレイ著
ローマ 1613年刊 1冊
縦18cm 横12.6cm

ガリレオ・ガリレイ（一五六四〜一六四二）は、十六・七世紀イタリアの物理学者、天文学者。早くからコペルニクスの地動説に賛同する一方、自作の望遠鏡を用いて天体観測をし、様々な新発見を行って著作に発表した。本書もその中の一冊である。

太陽黒点とは、太陽の表面に現れる暗い斑点はんてんのことで、大きさは地球の数倍に及ぶものもあり、その数は約十一年を周期として増減する。ここ数年は黒点の数が非常に減少し、世界的なニュースとなった。

太陽黒点が発見されたのは意外に最近で、十七世紀初めのこ

とである。第一発見者はガリレイとされるのが定説であるが、一六一二年から一三年にかけて、第一発見の功と、黒点とは何かをめぐって、ガリレイと、ドイツのイエズス会士天文学者クリストフ

・シャイナーとの間に、激しい論争が行われた。シャイナーは、黒点は太陽を周回する星であると述べ、ガリレイは太陽の表面にある雲のようなものだと主張したが、正しいのはガリレイであった。

標題紙の原題は「太陽黒点とその諸属性に関する研究と証明」。下半分の図版には、王冠



と円形の茨、その中に大山猫が描かれている。これは、ガリレイが所属していたローマのリンチエイ学士院の紋章である。

右の挿絵は、本書中のガリレイの肖像画。本書が出版された一六一三年、彼は四十九歳にあたり、壮年時の風貌ふうぼうを伝える貴重な図版である。

（天理図書館 瀬川清人）

天理図書館のお知らせ Tel: 0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>

◆平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）

○1月の休館日：年始休館6日まで・26日・30日

（本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）